

# 「まちのバリアフリー」 提言書

ノーマライゼーションのまちづくりをめざして

2005年10月

NPO 法人 調布まちづくりの会  
まちのバリアフリー部会

# 目次

1 . はじめに	1
2 . 今までの活動の経過	2
・「調布まちづくりの会」と「まちのバリアフリー部会」について	2
・第1回フィールドワーク「まちのバリアフリーフォトウォッチング」	3
・さまざまな要望とその成果	3
・「調布ふくしのまちづくり条例 施設整備マニュアル」をテキストにして	4
・第2回フィールドワーク「江戸川区の歩道と車道のゼロ段差を体験しに行こう」	4
・第3回フィールドワーク「飛田給駅周辺バリアフリーウォッチング」	4
・ワークショップ「第1回 みんなで話そう 調布のバリアフリー」	5
・踏み切りのバリアフリー視察	6
・今までの活動の記録	7
3 . 「第1回 みんなで話そう 調布のバリアフリー」のまとめ	10
4 . 提言	21
提言1 市民と行政との協働	21
・「協働」って何だろう？	21
・例えばこんなこと	21
・何が「バリア」になっているのか？	22
・責任部署を明確に	22
・参画のしくみづくりが必要	22
・「交通バリアフリー法」をふまえて	23
・マニュアル通りでは不十分	23
・お互いに顔の見える関係を！	23
・市民やNPOなどの役割	24
・協働を実現させるためのさまざまな手立て	24
提言2 共生をすすめ、相互理解を深めよう	25
・共に生きるということとは？	25
・「バリアフリー」がバリアになる	25
・一緒に育ち、一緒に学ぶ	25
・「学校教育」では	26
・もっとコミュニケーションのできる場を	26
・だれにでも楽しめる自然を	26
5 . おわりに	27
6 . 資料	28
・ワークショップ「みんなで話そう調布のバリアフリー」アンケート集計結果	28
・用語解説	33

## 1. はじめに

「NPO 法人 調布まちづくりの会 まちのバリアフリー部会」は、2002年7月から、障がいをもつ当事者からの思いや視点を大切にしながら、障がいのある人もない人も共に活動をしてきました。

主な活動として、京王線の調布駅や飛田給駅と駅周辺のフィールドワーク、「福祉のまちづくり条例施設整備マニュアル」をテキストにした施設や道路などのハード面の検討、歩道と車道との段差をなくす取り組みをしている江戸川区への視察、京王線調布駅周辺の踏切のフィールドワークなどといった活動や、さまざまな立場の人たちが自由に話し合える場としてのワークショップ「みんなで話そう調布のバリアフリー」を開催しました。

これらの活動を通して、あらためて調布のまちを「バリアフリーのまちづくり」という視点で見つめてみたとき、そこには難しい問題や課題があることが新たにわかってきました。私たちはこのような活動の中で話し合われてきたことや、ワークショップで出された多くの貴重な意見を整理して「提言」というかたちでまとめました。

この提言書が市民と行政が共に考え、行政の施策に反映され、調布が誰にとっても暮らしやすいまちになっていくことを強く願っています。

## 2. 今までの活動の経過

### 「調布まちづくりの会」と「まちのバリアフリー部会」について

1996年、「市民の手でまちづくりを」という思いから集まった市民が、調布市の都市計画マスタープランづくりに参加しました。ワークショップやシンポジウム、まち歩きなどを行い、議論を積み重ね、1997年1月に市民と行政で「調布まちづくりの会」を発足。1998年3月に市民と市政との協働で「調布市都市計画マスタープラン原案」を作り上げました。

この原案ができたあとも、そのまちづくりの理念であった「住み続けたい緑に囲まれるまち調布」の実現に向けてまちづくりに対する関心を高め、市民参加をより進めていくために、1998年10月新たに「調布まちづくりの会」を再発足させ活動を続けてきました。

2000年3月には特定非営利法人（NPO法人）の認証を受け、4月に「特定非営利法人調布まちづくりの会」を設立。まちの景観や統廃合される校舎跡地の有効利用、世代間の交流や地域通貨、情報のバリアフリーなど、さまざまなテーマで活動をしています。

私たちの「まちのバリアフリー部会」は、そうしたまちづくりの会の活動のひとつで、京王線の連続立体交差事業で大きく変わろうとしている調布のまちづくりを、バリアフリーやユニバーサルデザインという視点で考えながら、活動をしています。

「まちのバリアフリー部会」としては、2002年7月から月1回のペースで定例会を開いています。また必要に応じて、今までに3回のフィールドワークを行ってきました。そして、バリアフリーという視点から、メンバー一人ひとりの個人としての日々の活動もあります。これは生活の中で、車いすや視覚に障がいがあるためにバリアを感じたことに対する動きです。

定例会ですが、4回目までは「なぜ、まちのバリアフリーが必要なのか」といった議論や、ちょうどそのころ完成した調和小学校の施設について検討しました。

調和小学校に関しては、その後「シックスクール」としてもマスコミに取り上げられましたが、バリアフリーという視点からもいろいろな問題点があったように思います。

最寄駅から学校までの案内が不十分だったり、入り口手前の信号機のある道路で、歩道の縁石が切り落とされていないため車いすで歩道に上がることができない、点字ブロックが横断歩道まで適切に誘導されていないため危険、といったことなどです。教育委員会に質問書を送り、それぞれについて回答をいただきました。

## 第1回フィールドワーク「まちのバリアフリーフォトウォッチング」

第1回のフィールドワークは「まちのバリアフリーフォトウォッチング」。京王線の連続立体交差事業が始まる前の調布駅と駅周辺の現状を、何がバリアになっているのかをウォッチングしながら写真に記録するというものでした。

当日は7名の参加者で京王電鉄側の協力もあり、調布駅の南口駅前広場から駅構内、階段や改札口、ホームや売店、トイレ、券売機などのチェックを行うことができました。車いすを利用している人にとっては、階段昇降機やホームの幅など、決して安全で使いやすい駅とはいえませんでした。今後の駅施設の立体化に向けて京王電鉄の方々と、ともに考え活動していけるきっかけにすることができたように思います。

このフィールドワークを振り返る中で、視覚や聴覚に障がいのある方の参加がなく、意見がうかがえなかったということが反省としてありました。写真として記録を残すというフィールドワークのあり方についても視覚障がいの人にとってはどのような意味があったのか？ そうしたことをふまえて、第7回の定例会からは視覚障がいの方にも加わっていただくようになりました。今現在は聴覚障がいの方の部会への参加はありませんが、今後の課題としてさまざまな障がいだけでなく、高齢の方や赤ちゃん連れの方など幅広い方たちといっしょに活動していけたらと考えています。

## さまざまな要望とその成果

仙川駅から緑ヶ丘地区を循環する調布市のコミュニティバス東路線が今年の4月に運行を始めました。試乗会に行き車いすで乗ってみましたが、2000年の3月から運行をスタートした調布駅南口と飛田給駅北口の間を結んでいる西路線のバスも車いすのまま乗車することができます。その「車いすのまま乗車できる」ということがわかりやすいようにバス停に車いすのマークを表示していただくよう市の交通安全対策課と小田急、京王のそれぞれに申し入れをし、現在は表示されるようになっていきます。

また、調布市役所には1階と4階に身障者用のトイレがあります。狭くて決して使い勝手がよいとはいえませんが、利用しようとする案内の表示がどこにもなくて「あれっ、何階にあったんだっけ」といつも迷っていました。そこで2階の正面入り口のロビーにある庁舎内の案内板とエレベーター内の各階の案内に車いすでも使えるトイレがどこにあるのか表示をしていただくように市の管財課をお願いをし、これも今は表示がされました。

昨年11月には東京学芸大学美術学科主催の「ユニバーサルデザイン展」に会の活動をポスター展示するという形で参加をしました。会場にはさまざまなタイプの車いす、だれにでも使いやすい食器や杖などの展示のほか、新しい点字ブロックや人にやさしいコイン

ロッカー、音で認識できる書道など、学生の皆さんが考えたユニークなユニバーサルデザインの提案がされていました。

### **「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル」をテキストにして**

第8回の定例会からは「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル」をテキストにして具体的な施設や設備について検討をしました。

私たちは「道路」という項目の歩道と車道の段差について議論をする中で、マニュアルの「歩車道境界部の段差を残すこととし、その段差は2cmとする」という部分に注目しました。段差が2cmもあると車いすで通るとかなり「ガタン」という衝撃がある、でも視覚障がい者にとってはこの段差は必要なもの。日本の各地では独自にこの段差をゼロにする取り組みがされているということを読んだので、それはどのようなものなのか関心を持ちました。そこで実際に段差ゼロの取り組みをしている江戸川区に見に行ってみようということになったのです。

### **第2回フィールドワーク「江戸川区の歩道と車道のゼロ段差を体験しに行こう」**

江戸川区では13年ほど前から障がい当事者の団体が区行政の各部局にさまざまな要望を伝えて改善をしていくための意見交換会を行っているほか、区の道路を管理する区土木部としても「人にやさしい道づくり」に向けたフィールドワークや職員の研修、区内の視覚障害者用誘導ブロックのチェックを行ってきました。その中で視覚障がいの人や車いすの人たち、そして行政の試行錯誤の中から生まれたのが江戸川区独自の歩道と車道の段差をゼロにするという取り組みでした。

歩道と車道の間にはスロープ状のブロックを埋め込んで段差をなくし、歩道の端に視覚障がい者用の誘導ブロックを設置するという「江戸川方式」は、それがベストとはいえない部分もありますが、障がいをもった当事者と行政が共に考え、施策を決めていくというお互いの関係と協働の姿勢は、ぜひ調布でも実現させていきたいものだと思います。

### **第3回フィールドワーク「飛田給駅周辺バリアフリーウォッチング」**

2001年、京王線飛田給駅は当時の東京スタジアム（現「味の素スタジアム」）のオープンに合わせて改修工事がされました。駅周辺の環境も大きく変わりましたが、地区住民は区画整理や道路、駅前広場の整備に対して「飛田給まちづくり協議会」をつくり、話し合いを重ね、行政に対して要望を行ってきました。

歩道と車道の段差も車いすや視覚障がい、高齢の人たちなど、地域で実際に利用をする当事者と行政との話し合いの中で1cmということが決められました。

それでも実際に車いすや視覚障がいの人たちと歩いてみると、さまざまな問題点もあることがわかりました。点字誘導ブロックが適切に設置されていない、駅前広場を横切る車道と歩道との区別があいまいなため歩行者にとっては危険、といったことなど。

計画や設計、施工の段階に市民・利用者が参加し、意見を反映させていくことは大切ですが、施設や設備ができた後の評価や検証、そしてその結果をフィードバックしていつでも改修ができるというしくみも必要なことなのだと思います。

また、現在策定されている「社会教育計画」。今まで公民館などで行われている社会教育事業は、障がいをもっている人や外国人など、「社会的に参加の制約を受けやすい」人たちにとっては縁遠いものでした。それは事業が行われている施設に物理的なバリアがあるというだけでなく、講座やイベントなどが企画され内容が考えられる段階で障がい者や外国人の参加が想定されていなかったためです。

市民参加で行われている計画策定の起草委員には、まちのバリアフリー部会としてはありませんが、視覚・聴覚・肢体のそれぞれの障がいをもつ当事者が参加し、「あらゆる人に開かれた社会教育」を目指して議論をしてきました。

### **ワークショップ「みんなで話そう 調布のバリアフリー」**

施設整備マニュアルを検討しながら感じたことのひとつに、施設を新しくつくろうとしたり改修をするときに、福祉のまちづくり条例の基準に適合しているというだけでは本当に利用者にとって使い勝手のよいものにはならないのではないか、ということがあります。

例えば、2005年のオープンに向けて国領で建設が進んでいるNPO市民活動支援センター「アクロス」や、西部公民館の改修工事（その後工事は中止）また、仙川では「音楽・芝居小屋のある複合施設」を建設する計画があると聞きます。そうしたときに、実際にそこを利用する人たちの意見をどのように反映させていくかということがとても大切だと思うのです。利用者の声を聞かずに、その施設、トイレや視覚障がい者用の誘導ブロック、手すりなどを、マニュアル通りにつくればよいという姿勢のままでは、いつまでたっても本当にいいものはできません。

私たち利用する側の意見をどのようにしたら事業に反映させることができるのか。行政と本当の意味での協働のしくみ、パートナーシップを育てていくためにはどうしたらいいのか。広く市民の皆さんや行政、京王電鉄にも呼びかけて、連続立体交差後のまちの様子も思い描きながら、まちづくりについて考え、さらに関心が高まっていくことを願って、2004年5月8日、ワークショップ「みんなで話そう 調布のバリアフリー」を行いました。当日は45人の参加者があり、活発に意見が交わされました。

## 踏み切りのバリアフリー視察

2005年5月21日(土)には、調布駅周辺の「踏み切りのバリアフリー視察」を行いました。机上で議論するより実際に踏切の現場をみようということで、調布駅周辺の踏み切り5か所をフィールドワーク。

西側の広い踏み切りでは片側に歩行者用の通路があるものの、人が溜まって一気に歩行すると自転車や車との接触が感じられたり、非常ベルの位置に問題がありそうなど、実際に現場に立ってバリアフリーの視点で観察するとさまざまな問題点が浮き彫りにされて、意義のある一日になりました。



## 今までの活動の記録

- 2002.7.3 第1回定例会  
「なぜまちのバリアフリーが必要なのか」
- 2002.8.7 第2回定例会  
「民間作業所のバリアフリー改修について」
- 2002.9.4 第3回定例会  
「調和小学校新校舎施設について」  
・8月29日に行われた見学会での疑問点について、市の教育委員会に質問書を提出  
(質問書とその回答については別紙)
- 2002.10.2 第4回定例会  
「調和小学校についての質問書とその回答について」
- 2002.11.6 第5回定例会  
「ワークショップについて」
- 2002.12.14 **第1回フィールドワーク「まちのバリアフリーフォトウォッチング」**
- 2003.1.8 第6回定例会  
「フィールドワークのまとめと今後の部会活動について」
- 2003.2.5 第7回定例会  
「視覚障害のある方の立場から『まちのバリアフリー』について」
- 2003.3.5 第8回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル」をテキストにして具体的な施設や設備について検討
- 2003.4.2 第9回定例会  
「調布市コミュニティバス東路線試乗体験」について  
・コミュニティバス西路線、東路線のバス停にわかりやすい車いすマークの表示を要望。  
・市役所内に車いすでも利用できるトイレの案内表示を要望。
- 2003.5.7 第10回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル その2」  
(道路 歩車道の分離)
- 2003.6.4 第11回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル その3」  
(道路 歩道の有効幅員)  
鉄道敷地利用検討会について報告

- 2003.7.2 第12回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル その4」  
(道路 横断歩道)  
6月30日に行われた「おしゃべりサロン相互塾」について
- 2003.8.6 第13回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル その5」  
(道路 歩道と車道との段差・一般的事項)
- 2003.9.3 第14回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル その6」  
(道路 歩道と車道との段差・交差点における切り下げ)
- 2003.10.10 第15回定例会  
「調布市福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル その7」  
(道路 車乗り入れ部)

**2003.11.1～6 東京学芸大学「ユニバーサル展」に参加**

- 2003.11.5 第16回定例会  
「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その1
- 2003.12.3 第17回定例会  
「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その2
- 2004.1.7 第18回定例会  
「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その3

**2004.1.29 第2回フィールドワーク**

「江戸川区の歩道と車道のゼロ段差を体験しに行こう」

- 2004.2.4 第19回定例会  
「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その4
- 2004.2.20 第20回定例会  
「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その5

**2004.3.3 第3回フィールドワーク「飛田給駅周辺バリアフリーウォッチング」**

- 2004.3.3 第21回定例会  
「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その6
- 2004.4.7 第22回定例会

「みんなで話そう調布のバリアフリー」企画運営について その7

2004.4.17&24 臨時部会

ワークショップに向けた準備作業

2004.5.18 ワークショップ「第1回 みんなで話そう調布のバリアフリー」

2004.6.2 第23回定例会

ワークショップ「みんなで話そう調布のバリアフリー」をふりかえって

2004.7.7 第24回定例会

これからの活動について

2004.8.4 第25回定例会

仙川の音楽や芝居小屋のある複合施設についてなど

2004.9.4 第26回定例会

仙川の音楽や芝居小屋のある複合施設についてなど

・福祉総務課に「福祉のまちづくり」を進めるための意見を提出

・仙川の音楽・芝居小屋のある複合施設についての質問・要望項目

**以降の定例会では「提言書」づくりに向けた議論**

2005.5.21フィールドワーク「踏み切りのバリアフリー視察」

### 3. 「第1回みんなで話そう調布のバリアフリー」 ワークショップのまとめ

■ 2004年5月8日(土) 14:00~17:00  
調布市文化会館たづくり12階大会議場において「第1回みんなで話そう調布のバリアフリー」ワークショップを開催した。参加者総数45名により、多様で内容のある意見が活発に交わされました。

会場は調布まちづくりの会の活動ポスター、まちのバリアフリー部会の活動ポスター、部会スタッフによる市内のバリアフリーに関する写真ポスターなどの展示および参考資料の展示、そしてワークショップ用のテーブルを5セット設置という構成でおこなわれました。

総合司会の進行に従い、開会の挨拶のあと、パソコンで編集したまちのバリアフリー部会の活動報告をプロジェクターの映写によりおこないました。また、各テーブルのコーディネーター役の紹介と、キャッチボールの実践を交えたわかりやすいワークショップの進め方の説明がありました。

ワークショップはグループA~Eの5グループで、各グループには市内の地図と市内9駅の周辺地図、そしてA1サイズの模造紙が用意され、6~10名の参加者により行われました。各グループともワークショップの予定時間枠を超えてしまうほど、熱心に意見が交わされました。

休憩後のグループ発表のコーナーでは、各グループが話し合いの内容を表現した模造紙をパネルに貼り、興味深く聴き入る参加者の前で説明を行いました。



開会の挨拶



まちのバリアフリー部会活動報告



ワークショップの説明

■ 各グループ発表

【グループA】

グループ A は、車椅子利用者が日常的な体験に基づく都市施設の現状に対する意見や、問題解決のために、地域社会がまちのバリアフリーに関心を持ち、何をすべきかという意見、さらに様々な立場の人の中でも身体的障害があるにも係わらずその障害が外見的に判断できない人にとって、周辺の人の理解を得られることが少ないため、ハード面においてもソフト面においてもバリアを感じる人が多い、などの意見があった。

○車椅子で移動するとき

車椅子利用者にとって、電車を使っての移動の時、事前に通知しないといけない。これもバリアになるのでは？

だいぶ対応が良くなった。駅ごとに対応が違う。

車道のガードレールは車を中心に考えられている。人間を中心に考えるべき。

ガードレールの設置の仕方に疑問！

視覚障がい者用誘導ブロックは車椅子利用者にとってバリアでは？

点字ブロックのつける位置は本当にいいの？  
視覚障がい者同士の話し合いが必要。

歩道を斜めカットしているところ、コーナーは特に危ない！

新しい道路ができて同じ過ちをしているのは何故？

○ 地域での取り組み

子供や地域の人々の体験教育が必要。

社協の出前講座。  
→職員の意義  
→当事者が計画段階に参画する機会が必要。

親子体験などで大人の意識改革も必要

イベント等を行っていることで伝わる部分。

○ 障がい者でも外見で判断できない人が増えている。(約 4,000 人位)

・ろうの人  
・内臓疾患  
・ほか

問題が表面化しにくい

いろんな人がいることを念頭に置いて行動することが大事。

○ つつじヶ丘駅周辺

- ・ 駅付近の「渡る道」においては、視覚障がい者が安全に渡れるような工夫がほしい。



つつじヶ丘駅周

○ 布田駅周辺

- ・ (駅構内に) スロープはあるが、住宅地の中に入る。
- ・ 布田南通りなど車椅子での安全が保てる道路にした。
- ・ 歩道と車道をしっかり分けてほしい。



布田駅周辺

○ 調布駅周辺

- ・ 調布駅前の旧甲州街道の歩道をもっと歩きやすいよう幅員を広げる工夫を。
  - ① 電柱の地中化を。
  - ② 車入れの傾斜をなくす。
- ・ 車椅子利用者にとって調布駅 (構内昇降階段脇) のプラットフォームは狭いのでは？
- ・ (南口公衆トイレの) 身障者用のトイレの鍵の位置が高すぎる。
- ・ 農協横から品川道までの歩道の狭さは歩けるような状態ではない。早急に対処を。
- ・ 商店街 (西友、東急通り) の自転車の撤去を徹底して。



調布駅周辺

○ 西調布周辺

- ・ (駅構内飛田給寄り南側プラットホームに) スロープがあるが、遠いところにある。
- ・ とり残されている。
- ・ 商店街とマンションなどが連携できない。



西調布駅周辺

○ 飛田給駅周辺

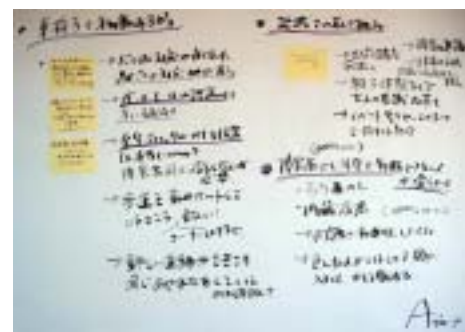
- ・ (旧甲州街道など) 歩道が狭く、凹凸が多い  
電信柱もあり、自転車、車椅子が通れない。
- ・ (駅南側のスペースで) 道路駐車(防止)のため、ポールを立て(ているので)、(日常)生活、車椅子に(とって)不便。
- ・ (品川道南側で) 歩道が途切れており、遊歩道へ行けない。→歩道整備



飛田給駅周辺



グループAのテーブル



グループA 参加者 (敬称略)

- ・ 岩井 ・ 福田 ・ 馬場 ・ 津田
- ・ 石川 ・ 戸井田
- ・ 藤山 (グループコーディネーター)



グループAの発表

グループ B では、地方と東京とのバリア度の違いについての参加者の実感や、駅周辺のアクセシビリティについて、特に移動手段を換える際のスペースを点から線、面への整備の必要性などの意見があった。又、市内の現状道路に対する批判的意見とともに肯定的意見もあった。

○ 地方都市に比べると東京の「バリア」は圧倒的・・・

地方都市→日常的に車で移動

東京→バス、電車、etc.

公共交通の乗り換えが多い

立体的な移動が多い

(大田区より市民の目が GOOD)

○ 自転車やバギーでの移動が危険／怖い

→道路がせまい。電柱、etc.

(世田谷より GOOD)

○ 市内は車で移動しても駅の駐車場や乗降スペースがない。

・ (駅周辺は) 移動のモードが変わるところ。

→点ではなく線として

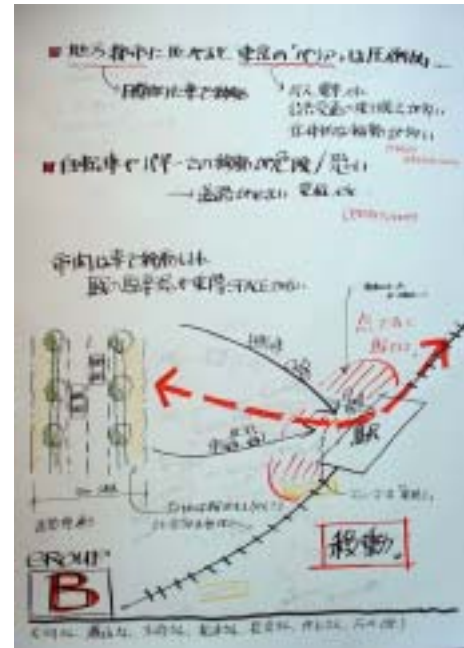
→余裕があること

→立体的な移動が多い

→違うものが共存できるか

→広ければ解決する (かも?)

でも全部は無理だし。・



グループ B 参加者 (敬称略)

- ・ 玉谷 ・ 松本 ・ 長友 ・ 井上
- ・ 藤山 ・ 大河
- ・ 石川 (グループコーディネーター)



グループ B のテーブル



グループ B の発表



## 【グループ C】

グループ C では、制度・システム、ソフト（人）、ハード（都市施設の現状）というテーマに分けて話し合い、多様な意見を通して「制度やシステムとハードをつなぐのは人」というメッセージとしてまとめている。

### ○テーマ「制度システム」

- ・意見をどこにもっていけばいいのかがわからない。
- ・都市づくりに安全都市などの文字があるが、安全な道路、危険な場所等の指摘があっているのでは？
- ・利用者と企画者によるつながりをもっとつくるべき。（テーマ「人」にも関係）
- ・一度に全部は変えられないので、出来ることから。
- ・バリアフリー化への具体的なアイデアを受け入れる部署を明確にする。
- ・新しい設備を取り入れる時、なるべく多くの声を聴いて役立てて欲しい。
- ・駅の職員に言わないと（階段昇降機などの）装置が使えない。
- ・行政のたて、よこの関係をどうつくっていくか。
- ・利用者のモニターとしての参加・協力が必要。（テーマ「人」にも関係）
- ・国道、市道、都道、私道の区分があり、バリアフリー化のすすめのさまたげになっている。
- ・市の発展のスピードに対し、行政、市民の対応がおそい。
- ・便利は好都合の施設があっても、十分に利用者に紹介されていない。エレベーターがあってもどこにあるかわからない。
- ・都市整備、造る側への必要な人々の参加が急務、行政システムの整備が必要。
- ・行政側との対話のしかた、直接の担当課との対話をすすめる。
- ・ニーズを吸い上げる／要求を出せるシステム作りが必要。

### ○テーマ「人」

- ・つくる前に利用者の意見を聞いてほしい。（テーマ「制度システム」にも関係）
- ・全体を見ることの出来るまとめ役が必要。
- ・駅周辺の自転車の放置が多く、車椅子を利用している人や視覚に障がいのある人が歩けない。
- ・市民のマナーについて、点字ブロックの上に自転車を置かない。
- ・放置自転車が置けないようにしているロープなどがバリアになる。（テーマ「ハード」にも関係）
- ・やっぱり駅周辺の放置自転車は困る。
- ・布田駅北側のスロープ出口前は、自転車が整理されて、出入りがスムーズに出来るようになった。
- ・色々な機能はあっても方法や規格が統一されていないので困る。（テーマ「ハード」にも関係）
- ・障がいのある人が身近にいないので設計者が良く知らない。（テーマ「ハード」にも関係）
- ・設計者（建築設備）のレベルが低すぎる。ユニバーサルデザイン以前。（テーマ「ハード」にも関係）
- ・良いと感じたこと。駅の外からボタンを押すと駅員に連絡ができるしくみができている。（テーマ「ハード」にも関係）

○テーマ「ハード」

- ・安全なホーム・弱者にやさしい駅づくり。テーマ「人」にも関係)
- ・正面入り口が自動ドアでなくて車椅子を入れる時不便である。
- ・駅の階段昇降機は視覚障がい者には危ない。
- ・調布の階段昇降機に車椅子以外の人、歩行困難の人、高齢の人なども利用出来るように。
- ・概して、新しい道路は気を使った造りがされるようになった。
- ・調布駅、つつじヶ丘駅 昇降階段脇のホームが狭い。
- ・調布駅ホームが狭くて危ない。
- ・駅内へ車椅子が入れない。
- ・鉄道駅の整備はかなり進んでいるように思うが、それとつながる道が未整備。
- ・レンガ状の歩道はガタガタして困る。
- ・一般的に都市づくりは車がメインのつくりとなっている。人間のまちづくりとして歩道の整備が急務。
- ・調布駅とつつじヶ丘駅北口のロータリーは車が主役になっている。真ん中に歩道が必要。
- ・調布駅北口の駅前のスペースが狭いので危ない。駅に出入りする人、待ち合わせの人、切符を買う人駅前を通り抜ける人・・・。
- ・歩道と車道の段差が必要なのか？
- ・歩道がおまけに付いている道路が多い。都立南高校から市役所への道路など。
- ・狭い歩道に電柱が大いばり。つつじヶ丘の北口バス通りなど。
- ・歩道中心の道路。歩道巾2メートル以上必要。
- ・駅前の歩道が狭い。
- ・(調布駅前) 歩道巾を広く。段差を少なく安心して歩けるように。
- ・バス停留所用点字ブロックがあったほうがいいのか？



グループCのテーブル



グループCの発表



グループC 参加者 (敬称略)

- ・石川 ・岩澤 ・戸井田 ・大野 ・大野 ・村山
- ・中村 ・高森
- ・大塚 (グループコーディネーター)

## 【グループD】

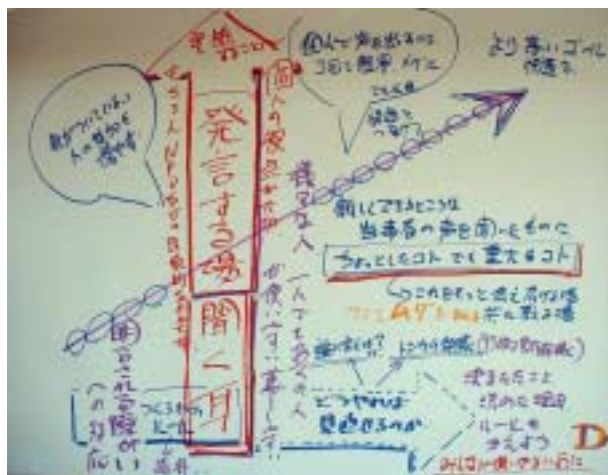
グループDでは、制度、ハード、ソフトなど、まちのバリアフリーの様々な現状を踏まえた上で、個人レベルにおいてもNPOにおいても、また行政においても、より住みやすい街をめざした協働のまちづくりを継続していく大切さについて意見が交わされた。

- ・発言する場・聞く耳→実施することへつながる。
  - ・個人の視点が大切。
  - ・個人で声を出すのは3回で限界、メゲル、でも必要。
  - ・気がついていない人の参加も増やす。
  - ・様々な人、一人でも多くの人を使いやすい、暮らしやすい（ことが大切）。
  - ・もちろんNPOなどの継続的活動も大切。
  - ・新しくできる施設は当事者の声を反映したものに。
  - ・ちょっとしたこと（意見）でも重要なこと（がある）。これをもっと伝え、広げる場、共に考える場が必要。そして（そのことでより）ムダをなくすことができる。
  - ・つくられたルール（条例や指針など）をどうすれば見直されるか。
- 誰に言えば？行政は実行部隊。決まったこと決めた理由。ルールも変えよう。みんなが使いやすいように。
- ・声を上げていきたい。上げる場づくり。
  - ・明言できないグレーゾーンの障がいのある人もいる、十人十色の人がいるはず。
  - ・縦割りも変化、でもムダ。
  - ・アクセスの工夫、省エネを考慮、ムダをつくらない。
  - ・ソフト、情報をどう入手するか。
  - ・歩けるまち→歩けない人には？
  - ・車のための道、マイカー優先により公共交通の利便性は高まったが、一方で歩ける、また歩く楽しみとしての文化的価値が希薄になったまちづくりになったのでは？
  - ・車道優先による狭い歩道では、段差、すりつけ勾配など車椅子利用者や歩行者にとって過酷な様相を呈している。
  - ・鉄道車両の座席はいったい誰のため？
  - ・学びの居場所
  - ・縦割りをつなぐために
  - ・各講座、学習会の場をすべて参加できるようにする。
  - ・道路改修にあたって自動車よりも歩行者を中心に考える。
  - ・放置自転車、特に点字ブロック上
  - ・歩道の整備、広くする。
  - ・今までも障がいのある方と接してきましたが、私に何が出来るかしか考えてなかったが、これからは何をしなければならないかを考えてみたいと思って参加しました。
  - ・段差の少ない道になるといいな。
  - ・いろいろなことに声を出せたらいいな。
  - ・安心して歩き回れる街がいい。
  - ・街の歴史や文化にだれもが触れる」ことができる街。

- ・便利な車を不便に、不便な人が便利に。
- ・介護ベッド付車椅子用トイレ（ユニバーサルトイレ）を主要施設に整備してほしい。
- ・歩道が斜めになっていて、とても車椅子を押しにくい。高齢で足が不自由な方も歩きにくいと言っていた。歩きやすい歩道にしてほしい。
- ・バリアフリーのまちづくりに終わりはない。ゴールはない。
- ・一人でも多くの方が快適に暮らせるまちのために何ができるか、何をしているか。
- ・建築計画から建設終了後の評価をしっかりフィードバックしていくシステムが必要。
- ・悪かったところを批難するのではなく、次のステップへつなげる。



グループDのテーブル



グループDの発表

グループD 参加者（敬称略）

- ・浅利 ・長岡 ・馬部 ・任海 ・酒見 ・小林
- ・愛澤
- ・鉄矢（グループコーディネーター）

## 【グループE】

グループEでは、まちのバリアフリーをソフトバリアフリーとハードバリアに分類して、さらにそれぞれ参加者の体験から掲げたキーワードについて話し合った。特に聴覚に障がいのある人の具体的な貴重な意見があった。

○ソフトバリアフリー（\*は聴覚に障がいのある人の意見）

「情報バリア」

- ・まちのなかでの情報の保障を。
- ・\*宅配ピザなど、ファクス注文ができるようにしてほしい。
- ・\*事故などで電車が止まってしまったとき、ドアの開閉など、車内アナウンスが聴こえないので困っている。
- ・\*JR中央線では事故時に紙に書いた注意標識カードを駅員から伝えてもらえるが、私鉄ではどうか。
- ・\*事故などの非常時に車内電光掲示があればと思います。
- ・\*バリアフリー関係の資料等の連絡先にファクス番号が入っていないため、聴覚障がいを持っていると問い合わせもできない。

「気持ちのバリア」

- ・差別や偏見からのバリアフリー。まず、ハンディをもって生きていくことに自信をもって。
- ・精神障がいのための差別や偏見からのバリアフリー。
- ・目に見えない障がいへの理解を深める。
- ・自分のこととして考えることのできる感性。

「技術の進歩によるバリアフリー化」

- ・骨伝導システム。
- ・携帯電話・メールの普及。

「制度」

- ・\*通訳派遣や支援費などのサポート制度が本当に利用者本位か？

「きっかけ」

- ・いろんな立場の人が共存していくためには、たくさん話し合いが必要。
- ・日常的に見過ごしてしまっていることを改めて気づく。
- ・車椅子利用者にとってバリアになることが、視覚に障がいのある人にとっては必要であることもあり、また逆のこともある。共存することの難しさを感じる。
- ・\*ハモニカ横丁のような狭さが雰囲気をつくっている場所など、車椅子利用者や視覚に障がいのある人はどう感じているのかな？

「教育」

- ・まちづくりの成果からの学習を導入。

「こんなのあったら」

- ・居酒屋マップがあればいいなあ。車椅子はOKのマーク。
- ・W.C.の手摺や鍵が自由自在に使えるよう工夫があったらいい。
- ・\*車内文字映像をふやそうね！

#### ○ハードバリアフリー

「調布のいい所」

- ・多摩川ベリの散歩道はいいなあ。(車椅子でのアクセシビリティが良くなっている)
- 初めて調布に来たが、調布駅南口はうらやましいと感じた。
- ・京王線連続立体化事業による駅周辺の計画に、現在の南口広場の噴水(おへそになるシンボル)があればいいなあ。
  - ・日本は福祉制度が遅れているような気がするけれど、調布市がある東京ってまだいいほうだと思う。
  - ・調布駅南口広場の樹はどうなるのかな。
  - ・\*大型複合店舗内のドーナツ販売店でセルフサービスになって、聴覚に障がいがあっても、自分で選んで買えることができるのがよかった。

「バリア」

- ・飲食店など、決まったところしか行けない。
- ・駅の階段昇降機の使い勝手の悪さ。点字表示など、どれだけの人が読めるのか。市役所通りの歩道の狭さ。
- ・調布駅東口付近の放置自転車。
- ・歩道が狭い上に、路面が斜めになっていて(つつじヶ丘駅周辺)車椅子ではとても怖い。
- ・駅のホームが狭い。階段昇降機も車椅子だけにしか対応していない。



グループEのテーブル



グループEの発表



グループE 参加者(敬称略)

- ・後藤 ・小林 ・大川 ・上條 ・山本 ・小林
- ・新井(グループコーディネーター)

## 4. 提言

### 提言1 市民と行政との協働

#### 「協働」って何だろう？

私たちは、「協働」という言葉を行政が行うさまざまな施策への市民参加や、まちづくりを進めていく上でのひとつのキーワードとして「市民と行政とのパートナーシップ・お互いが対等な立場で協力し合いながら同じ目的を達成していく」と理解しています。

一方、『調布市総合計画』の「基本構想」の中では“市民が主役のまちづくり”として「構想の実現に向けて、市民と市役所がそれぞれの役割の中、時代環境の変化や地域課題に向け、ともに力を合わせ、ともにまちづくり活動をする協働のまちづくりのしくみを確立します」と述べられています。

このような使われ方をしながらも、私たち市民にも、また行政の職員にとっても「協働」というのはどういったことなのか、具体的なイメージがつかめない、その意味や効果、範囲がよくわからない、といった声も少なくありません。

いったい「協働」って何でしょう？

#### 例えばこんなこと

西部公民館の改修工事が2004年度に行われる予定で、利用者に向けた懇談会が2003年7月と9月に開かれ、まちのバリアフリー部会のメンバーも参加しました。車いすを使用している人と視覚障がいのある人が当事者として「多目的トイレ」や「出入り口のスロープ」「点字ブロック」などについての要望を伝えました。さらに懇談会の場以外でも、行政や設計事務所の方も交えて何度も実際の現場に立ち会いながら検討しました。工事を担当する営繕課の方たちは、そうした声を可能な限り設計に反映できるようしっかりと受けとめようとする姿勢で設計図面を含めた改修プランを作っていました。

これは協働のあり方として評価できると思います。残念なことにこの改修プランは、市の行財政改革アクションプランで見送られてしまいました。

しかし、改修プランを作っていくまでの過程は「市民と行政の協働」が具体的なかたちとして現れたひとつの姿だったのではないかと思います。

それでは「バリアフリーのまちづくり」を市民と行政が協働して実現させていくためには、どんなことが求められるのでしょうか。

## 何が「バリア」になっているのか？

市民がバリアフリーに関する意見を行政に伝えたいと思っても、どこへ意見を持っていけばいいのかがよくわからない、担当の窓口はどこなの？ 相談の窓口があったとしてもほとんどの市民がそれを知らない、ということがあります。

また、バリアフリーに関する課題を解決していくために、行政の組織の中でどこの部署が責任を持ってリーダーシップをとっていくのかということがはっきりとしていません。

職員一人ひとりがしっかりと市民の声に耳を傾け、市民の投げかける課題やニーズに適切に対応することができないということもあります。

こうしたことの一つひとつが、市民が行政と「協働」していくうえでのバリアになっているのではないのでしょうか。

## 責任部署を明確に

行政のありかたとして各担当部署がそれぞれの分野で責任をもつことは当然ですが、バリアフリーに関しての専門的な知識やノウハウを持ち、市民にとっての必要なニーズを的確に把握して施策や事業、施設や設備などに反映させることが大切です。そこで、全体を見ることのできるまとめ役・各関係部署や機関との橋渡しをすることができるコーディネーター的な役割を持つ部署の設置や職員の配置が必要です。

また、静岡県ユニバーサルデザイン室などの先進事例があるように、たとえば「バリアフリー課」といった窓口をつくって具体的なアイデアを受け入れる部署を配置することも考えられるのではないのでしょうか。

行政として行われるすべての施策について、その内容がバリアフリーやユニバーサルデザインの視点からみて適切なのかどうか、そのことにどこの部署が責任を持つのかということを確認する必要があります。さまざまな事業計画の策定や施設の新設・改修そしてコミュニティバスの車両選定などには、必ずこの責任部署と担当の各部署、そして障がいをもっている人たちや高齢者などの当事者が意見交換をしながら決めていくしくみづくりが求められます。

## 参画のしくみづくりが必要

施設や道路などの新設や改修が行われることを市民が知るのは、計画や設計がすでできあがってしまってからということがほとんどです。そのために実際にその場所を利用する市民の声を反映させることができませんでした。

企画、立案、設計、施工、そして実際に利用してみて使い勝手はどうなのかという、事前の検討から事後の評価までのそれぞれの段階に、しっかりと利用する当事者である市民が継続的に参画し、意見を反映させていくことのできるしくみづくりが必要です。

さらにこのような市民参画の過程で得られた情報やノウハウは、その場かぎりで終わらせるのではなく、次の事業にもつなげ活かしていくことも求められます。



## **「交通バリアフリー法」をふまえて**

調布市では現在「交通バリアフリー基本構想」を策定しています。策定にあたり、京王線の連続立体交差事業で大きく変わろうとしている調布・布田・国領駅とその周辺をはじめ、地下化で生まれる鉄道敷地をどのように利用するのか、駅前広場や道路（歩道）、トイレなど市内の各駅でも周辺のまちづくりとも考え合わせながら面的なバリアフリー整備をしていく必要があります。

また、鉄道の地下化でいくつかの踏み切りの解消がはかられますが、それでも地上線路では多くの踏み切りが残されます。全国的にも踏み切り内やその周辺での事故が起きているのですが、私たちが行った調布駅周辺の踏み切り視察によって得た問題点として、踏み切りが歩行者よりも自動車や電車の交通の利便性を優先した構造になっていることがわかりました。踏み切りでの安全とバリアフリーのあり方も含め、公共交通機関を中心としたバリアフリー整備については、利用者である市民と、行政、そして鉄道やバス事業者が協働して検討し、改善していく必要があります。

## **マニュアル通りでは不十分**

施設のバリアフリー整備についてはひとつの基準として「福祉のまちづくり条例」の「施設整備マニュアル」があります。ただしこれはあくまでも最低限の基準で、このマニュアルに盛り込まれている内容を満たしてさえいれば、その場所を利用する人たちにとって使いやすいものになるかという点必ずしもそうとはいえません。

たとえば、歩道と車道の段差も「福祉のまちづくり条例」などでは2センチという基準がありますが、車いすの人たちと視覚障がい人たちとの話し合いのなかでできるだけ段差をなくしていこうという取り組みが各地で行われています。実際にその場所を利用する当事者の体験にもとづいた生の声をどのように反映させるのかということです。

## **お互いに顔の見える関係を！**

私たちは行政の職員のみなさん一人ひとりとお互いに「顔の見える」関係づくりをしていきたいと考えています。そのためには市民と行政がきちんと対話・コミュニケーションができる具体的な場が必要です。そして、市民ニーズへの的確な対応ができるように、「縦割り」の組織から関係各部署が必要に応じて連携していけるような柔軟な行政組織づくりも求められるでしょう。

行政のそれぞれの部署の職員がバリアフリーやユニバーサルデザイン、障がいをもった人たちや高齢者などへの理解と知識を深め、いつでも、すぐに適切な対応ができるようになることも大切です。そのためには教科書から学ぶ、かたちだけの職員教育や研修だけではなく、実際に当事者に接しながら、どのような問題を抱えているのかということを感じることができるよう取り組みも必要でしょう。

## 市民やNPOなどの役割

市民の中にはさまざまな意見やアイデア、技術や知識、情報を持っている一人ひとりの個人がいますが、団体やグループに所属していないとなかなか発言や活動の場が得られないことがあります。このような地域にうもれている人材を見つけ出し、活かしていくためには、啓発の場やワークショップなどの機会を増していく必要があります。

NPOなどの市民グループは、個人の声の重みを大切に、さまざまな生の意見や活動をコーディネートしたり、組織化されていない個人のネットワーク化をしていく力を持っています。

行政はこうしたNPOをもっと活用し、施策に反映していく必要があります。そのためには、NPOなどが行うイベントやワークショップなどにも行政の職員がもっと積極的に参加するとともにNPO活動への支援が求められます。

市民も苦情を訴えるだけでなく、どうすれば問題が解決してよりよい方向に向かうのか、行政と一緒に考え取り組んでいこうとする姿勢が必要でしょう。自分たちのまちの問題を行政まかせにするのではなく、自分たちの問題としてとらえていく自覚も大切です。

## 協働を実現させるためのさまざまな手立て

昨年11月、調布市は「市民参加プログラム」を策定し公表しました。さらに現在、「住民自治基本条例」の制定に向けた準備と検討がなされています。また、市民が行政の方たちと直接意見を交わせる場として、たとえば市長と語る「ふれあいトークン」などがあります。私たちはこのような市民参加や市民と行政との対話・コミュニケーションを活発にさせるためのシステムや制度を、積極的に、そして有効に活用していきたいと考えています。

市が設置する委員会や検討会などには必ず市民の中から公募の委員を含めるようにし、その数も今以上に増やしていく必要があります。いつどのような集まりが設けられて開かれているのかという情報を、より市民がわかりやすいように公開し、気軽に傍聴ができるような工夫も求められます。傍聴者の意見も参考にして反映させていけるしくみづくりも大切でしょう。

## 提言2 共生をすすめ、相互理解を深めよう

### 共に生きるということとは？

私たちの社会は障がいのある人とない人、自分とは違う障がいを持っている人、おとしよりと子ども、文化やことばの違いのある外国人、歩行者と自転車の利用者など、様々な人たちが暮らしています。しかし人間同志の無関心と断絶により、お互いの立場を理解し合うことが困難ななかで、私たち一人ひとりが生き生きと自分らしく、そして共に生きていくためにはどうすればよいのでしょうか。

具体的な例でいえば、聴覚や知的、精神、内部障がいなど、外見ではわかりにくい障がいのために、なかなか問題が表面化しない人たちのことを理解するためにはどのようなことが必要なのでしょうか？

### 「バリアフリー」がバリアになる

人々がまちの中で生活していくときに、だれかにとっては「バリアフリー」になることが、ほかのだれかにとってはそれが「障がい」になってしまうことがあります。

たとえば点字誘導ブロックや歩道と車道の間にある数センチの段差。視覚に障がいのある人たちがまちの中を歩いて移動するときには安全のために必要なものですが、車いすやベビーカーでは「ガタガタン」という衝撃があって通りにくくなってしまいます。

また、セルフサービス方式の店舗は、聴覚に障がいがあって「言葉」を発することが難しい人たちにとっては便利ですが、障がいのために何にでも手を出してしまうお子さんを伴ったの買い物は利用しにくいということもあります。

参考：私たちのワークショップに障がいのあるお子さんといっしょに参加されていたお母さんから「障がいといっても実にさまざま。今日もそのことを学びました。ともすると自分の子の障がいのことのみになりがちなので、視野を広げることが大切にしたいです。お互いに。たとえば、パルコのミスタードーナツがセルフサービスになり、聴覚障がいの方が入れるようになったと聞き、そういう方もいるんだと発見がありました。でも私のように何でもつかんでしまう娘とともにには利用できなくなった人がいることも知ってほしいです」という意見がありました。

### 一緒に育ち、一緒に学ぶ

まず出会うこと、お互いを知ることとなければ理解も生まれません。多様な人たちが共に生きているということを幼いころから当たり前のこととして受けとめ、どの子ども同じ場で育ちあい同じ場で学びあうことのできる、そうした環境が大切です。そのような中でこそお互いのことを自分のこととして考えることのできる感性も育っていくのではないのでしょうか。

## **「学校教育」では**

調布市の小・中学校でも総合学習の時間に、障がいや障がいをもっている人たちへの理解を深めようという取り組みがされているとききます。そのような機会にまちのバリアフリー部会のメンバーも講師として子どもたちと関わることがありますが、ともすると「子どもたちへ言葉が届かない、気持ちや考えが伝わらない」といったもどかしい思いをすることもあるようです。学校教育の場だけでは、時間的にも出会い方や関わり方という面でも限界があるのかもしれませんが。

ふだん生活しているさまざまな場面で、子どもたちと障がいをもっている人たちがもっとあたりまえに出会って知り合っていくことができる場が必要です。その経験が土台となり、「学校教育」にも生かされていくのではないのでしょうか。

さらに障がいをもっている子どもたちが障がいをもっていない子どもたちと一緒に学習することが当たり前になる教育環境になることも大切で、それが実現できるように配慮された学校施設などハード面においても整備する必要があります。

## **もっとコミュニケーションのできる場を**

点字誘導ブロックの上の放置自転車や、歩道や通路にはみ出して置かれた商品や看板など、そのことで不便をして困っている人たちがいるということに思いがいたらないために、何気なくつくられてしまう「バリア」もたくさんあります。

話し合う場、お互いのことを知り、理解するための機会が不足していることが大きな原因です。私たちまちのバリアフリー部会の活動も、お互いのコミュニケーションや出会うことのできる場のひとつだと考え、広く市民に関心をもってもらえるよう働きかけていますが、行政としてもそうした活動を支援し活用することが必要です。

## **だれもが楽しめる自然を**

調布には多摩川や野川といった市民に親しまれている川があります。また、深大寺周辺や神代植物公園、実篤公園など、東京にあって豊かな自然が残っていることは調布の特徴でもあり、大切な財産ともいえるでしょう。しかし、こうした自然環境がだれにとっても楽しめるように整備されているわけではありません。公園や散策路などは、障害をもった人たちや高齢者などでも安心して利用できるように配慮をした整備が必要です。

## 5 . おわりに

私たちがバリアフリーのまちづくり活動を始めた主なきっかけは京王線連続立体化事業にともなって調布のまちが変わっていくのにあたり、バリアフリーという視点でまちづくりを考える必要性を感じたからです。そこで私たちの活動をとおして具体的な課題が浮き彫りになり、ここにいくつかの提言をさせていただきましたが、最後にこの提言書のメッセージを要約すると以下ようになります。

- ・ 市民と行政の協働のまちづくりを図ること
- ・ 人と人が共生し、相互理解を深めること

更に、このメッセージの実現のためには市民も行政もともに学ぶという姿勢が大切だと思います。私たちの会の活動が地域に開かれ、貢献できるようこれからも地道な活動を継続していきますので、行政としても私たちのこの提言を十分理解していただき、施策に反映していただくよう切に願っています。

## 6. 資料

資料1……ワークショップ「みんなで話そう調布のバリアフリー」アンケート集計結果

開催日 2004年5月8日(土)

参加者数 45人(スタッフ・ファシリテーター含む)  
アンケート回収数 24枚  
付箋紙 21枚

[ アンケート回収内容 ]

1. 今回のワークショップはどちらでお知りになりましたか?(複数回答あり)

- 1. ポスター・チラシ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 ( 12.5% )  
( 場所は無記載 )
- 2. 市報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 ( 0.4% )
- 3. 調布FM・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 ( 0.4% )
- 4. 月間パレット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 0
- 5. 新聞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 0
- 6. 知人から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18 ( 75.0% )
- 7. その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 ( 16.7% )

2. あなたがまちの中で「バリア」だと感じるのはどんなところですか? いくつでも をつけてください。

- 1. 放置自転車・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20 ( 83.3% )
- 2. 道路や建物の段差・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20 ( 83.3% )
- 3. 駅の階段・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15 ( 62.5% )
- 4. 情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8 ( 33.3% )
- 5. コミュニケーション・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 ( 29.2% )
- 6. 高齢者や障がい者などに対する理解不足・・・・・・ 13 ( 54.2% )
- 7. トイレ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8 ( 33.3% )
- 8. 映画館や劇場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 ( 16.7% )
- 9. 電車やバス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 ( 29.2% )
- 10. 商業施設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 ( 16.7% )
- 11. 公共施設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 ( 16.7% )
- 12. その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 0

### 3. そのバリアを「バリアフリー」にしていくためにはどのようにしたらよいでしょうか？

#### 行政との協働

- ・市民の声を集約して行政に伝え、実行させていくこと。
- ・市民グループの意見集約を強め、行政との協力関係を築いていくこと。行政の所管担当で任せるのではなく、市政全体の立場から市民本位の視点で進めていくこと。
- ・市と市民との協働のシステム。
- ・市と相談していくことだと思います。

#### 共存・相互理解

- ・共存していくため、この企画のように草の根運動のような多くの市民に知ってもらうための働きかけが大事だと思います。
- ・お互いのことをよりよく知るべきである。
- ・障害者の方、地域の方双方がお互いのことを考え、知り、話す場が増えること。
- ・それぞれの立場にとってバリアが違うものならば、話し合っ決めていくしかないというのでしょうか。話し合える場（普段の会話でも）がふえるといいと思います。

#### 教育・広報

- ・関心のない人たちへの働きかけ、学習会、講座の開催、資料配布。
- ・広報、教育、主体性の充実。
- ・教育（小・中・高）
- ・一人一人が「バリアフリー」という言葉を広げていくことだと思います。
- ・根気よく、「あきらめず」「あせらず」「あきず」「あわてず」に市民自体も意識改革をする。教育を行う。

#### 調布まちづくりの会に期待

- ・どんどん発言する。こういう場を増やす。できる人（行政など）に橋渡ししてくれる人が必要。まち会に期待します。

#### その他

- ・みんなで工夫する。
- ・一番大切なことは、バリアを感じている人の声を聞くことだと思います。次にその声を具体的にしていくことです。
- ・市民が一団となって考えていく方法を考える。
- ・何がバリアと感じているかを声に出していくこと・・・・・・・・・・・・・認知  
その声（いろいろ）をまとめて、その段階でのベスト案をつくること・・・・調整、立案

- ・ベスト案をみんなで協力して実行に移していくこと・・・・・・・・・・協働
- ・要求の場をつくる
- ・これといった解決策が見出せません。市民みんながバリアと感じていただくしかないのでは？
- ・システムとしての実績の蓄積。

4. ワークショップに参加されてみていかがだったでしょうか？ 何でもかまいません。ご意見、ご感想をおきかせください。

- ・どうもありがとうございました。第2回もできることを楽しみにしています。
- ・今後ともよろしく。
- ・大変よかった。
- ・楽しかったです。当事者の意見を聞いたのが良かったです。
- ・だれでも気軽に参加し、発言できる雰囲気がとてもよかったと思います。特に障害がある方が参加され、発言され、とてもよかったと思います。より多くの参加があればいいですね。
- ・根気よく、くり返しくり返し企画して、成果あるようにしていきましょう。
- ・よかった。
- ・知らない世界を見せてもらった感じです。
- ・「声を聞いていただいた」という良い印象。その声を次にどう活かされるのか期待したいです。
- ・ワークショップとしてはあまり参考になるとは思いませんでしたが、地域、行政の人たちとの解決策を見出すことが大事と思っています。先を期待します。
- ・新しい町づくりに対する関心度が増した。
- ・いろいろな考えがあり、たいへん勉強になりました。また次回も参してみたいと思います。続けていくこと、参加者を増やすこと、声を大きくすることが大切かなと思います。お疲れ様でした。
- ・もっといろいろな障害者の参加が必要。関係部署の市役所をお呼びしたほうがよいのでは。
- ・多様な話が出たが、ここから何かそだってほしい。広い視野が今日得られた。
- ・立場の異なった方の意見をうかがえて今後の参考にしたい。
- ・多くの意見が出たが、どういうふうにまとめられるのか？
- ・当たり前のことだと思いますが、バリアフリーということは難しい問題だと思います。こういうワークショップをくり返すことでコンセンサスができてくれればと思いました。



[ 付箋紙からの意見 ]

今後の活動・あり方

- ・成果が目に見えると市民の興味関心も高まると思うので、今回の結果をどのような形にできるか、どのように宣伝するかがポイントではないか、と思います。
- ・聞きっぱなしにならないようにしてください。
- ・2回目以降はテーマを明確にしてはどうでしょうか。たとえば、地域別、機能別(施設)、今回は議論が発散しすぎた気がします。
- ・大変有意義な集会でした。まだまだ意見、または情報が出ることが期待できると思います。連続、または定期的な交換の機会ができればと思います。
- ・本日のような多くの意見がひとつでもふたつでも確実に実現できることを願います。どうぞがんばってください。参加者が調布市民全員となりますように。
- ・これからの高齢化社会に向かって大変重要な催しだと思う。続けてやってほしい。
- ・このイベントの成果物を生かせるように、しかるべき相手先に働きかけていただきたい。
- ・参加してよかった。またこのような機会を作ってください。次回はもっともっとたくさんの方を誘いたいです。勉強になりました。もっともっといろいろな方のお話をうかがいたかったのですか、時間が足りませんでした。
- ・市民間の意見交換だけでなく、市行政との真剣な意見交換も企画して。
- ・行政の上からの企画ではなく、市民から生まれた企画にとても素晴らしいと思います。これから期待しますし、参加していきたいと思います。

広報・PR

- ・もっとたくさんの人に来てもらうには？ 関心のない人たちにも広めたい。
- ・聞こえない人たちにもっとPRしてほしい！！(ろう協会などの団体に事前に伝えてほしい)
- ・メディアを活用してもっとひろめてほしいなー。

共存

- ・お互いの立場で考えるキッカケになりました(共存)
- ・テーマは共存かな……。話し合い(ポストイット)

その他

- ・このような市民参加、市民学習のような公的マニュアルづくりもやったほうが良い。
- ・バリアフリーまちづくりについて日常的に取り組んでいる団体を知ることができてよかったです。子連れで参加せざるを得ないので、恒常的に参加できないのが残念です。障害児の保育があれば参加しやすくなります。

話し合いの内容は、調布の具体的なハード面から抽象面まであり、今後市に反映していくには整理して話し合いを煮詰めていく必要があると思います。

障害といっても実にさまざま。今日もそのことを学びました。ともすると自分の子の障害のことにのみになりがちなので、視野を広げることが大切にしたいです。お互いに。

たとえば、パルコのミスタードーナツがセルフサービスになり、聴覚障害の方が入れるようになったと聞き、そういう方もいるんだと発見がありました。

でも、私のように何でもつかんでしまう娘とともに利用することができなくなった人もいることも知ってほしいです。

- ・バリア(障壁)を取り除くにはハード面が必要である。そのことをどう生かせるかは「人」とのふれあい、障害者とのふれあい、理解しあうことがとても大切と再認識しました。システムの問題を解決するのも「人」の力であり、人と人を連携していく、そんなまちづくりを目指していきたい。
- ・自分の気がつかなかった「まちのバリア」が発見できました。いずれちょっと相手の立場に立って考えればもう少し、気持ちよく暮らせるまちになりそう。お金も手間もかからない「キャッチボールしよう」という気持ちを広げるのも大事ですね。
- ・今回のような集まりにはじめて参加しました。「物事の第一歩とはこんな風にはじまるのか」というのが感想です。次につながると良いですね。
- ・第一回目にしては成功だったと思う。影で動いてくださったまちのバリアフリー部会の皆様方、ありがとうございました。今後の活動に生かしていきたいと思います。

## 資料2……用語解説

### ・ノーマライゼーション

1950年代、デンマークのミッケルセンという人が提唱した。障がいのある人たちが普通に自立した生活ができるように社会環境を整備し、障がいのない人たちと同じ生活条件をつくり出すこと。また、そういうことがあたりまえであるという考え方。

### ・バリアフリー

Barrier（障壁）とFree（自由な、開放された）を組み合わせ造りだされた言葉で、障壁が無いというような意味で使われる。アメリカなどではあまり「バリアフリー」という言い方は少なく「アクセシブル アンド ユーザブル」という言い方が多い。一般的にバリア（障壁）とは、物理的バリア、制度的バリア、文化・情報のバリア・意識のバリアに分類されている。

### ・ユニバーサルデザイン

年齢・能力・体格・障がいの有無などに関係なく、だれもが使いやすいデザイン（設計）のこと。また、その考え方やプロセスのこと。この考えは1985年頃からアメリカのロン・メイスという人が中心になって推し進められ次の七つの原則を挙げている。

公平性……誰にでも使用でき、入手できること。

自由度……どんな条件にも柔軟に使えること。

単純性……使い方が明快で容易であること。

分かり易さ……必要な情報が直ぐに理解できること、不必要なものを省きシンプルで直感で分かるデザインであること

安全性……デザインが原因の事故をなくすこと、うっかりミスや危険につながらないデザインであること。

省体性……無理な姿勢をとることなく、余計な力を使わずに少ない力でも楽に使用できること。

空間確保……アクセスしやすいスペースの広さと十分なサイズの大きさを確保すること。

### ・コミュニティバス

路線バスと乗り合いタクシーの中間的な役割をもつ小型バス。一般の路線バスが運行できない交通の不便な地域に公共交通の再生の方途を探る手段として期待されている。当然、前述のユニバーサルデザインの考えで利用されることが求められる。

### ・交通バリアフリー法

高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の円滑化の促進に関する法律公共交通機関の駅あるいは乗り物等をバリアフリーにすべく制定された法律。

「まちのバリアフリー」提言書 ~ ノーマライゼーションのまちづくりをめざして

2005年10月

特定非営利活動法人 調布まちづくりの会 まちのバリアフリー部会

<http://www.annie.ne.jp/~machikai/machino/>

〒182-0024 調布市布田 1-45-6-605 TEL・FAX : 0424-88-4022 e-mail : machikai@annie.ne.jp